

計画7-3

ニホンザルにおけるリンパ腫の2例
柳井徳磨（岐阜大・獣医・病理），木村直人
（JMC），後藤俊二（京大・霊長研）

ニホンザルにおける病理情報は極めて少なく，なかでも腫瘍に関する報告はほとんどない。ニホンザルにリンパ腫の2剖検例を経験したので，その病理学的特徴を報告する。

（症例1）雌のニホンザル（*Macaca fuscata*），26歳。霊長研で飼育中の1988年7月11日に死亡を発見。肉眼的には，脾臓は著しく腫大し（9 X 6 X 4cm），剖面では径約5mmの灰白色腫瘍が多数認められた。組織学的には，成熟リンパ球と同程度の小型のリンパ球様腫瘍細胞が白脾髄を主座として増殖し，赤脾髄内に浸潤性に浸潤していた。肝臓，肺，腎門および肺門リンパ節においてもリンパ腫の浸潤増殖が種々の程度に認められた。本例は小細胞型リンパ腫と診断され，原発部位は脾臓が疑われた。

（症例2）雌のヤクニホンザル（*Macaca fuscata yakui*），15歳。JMCにて飼育中の1994年8月27日に元気がなくなり，翌日死亡を発見。剖検では下顎リンパ節など体表リンパ節が鶏卵大に腫大し腫瘍状を呈していた。脾臓，左腎，左副腎，脾臓は癒着し塊状をなす。多量の腹水が貯留。脾臓は著しく腫大（6 X 4.5 X 3.5cm, 70g），実質はわずかに辺縁に残り，ほとんどは灰白色腫瘍により置き替わっていた。左腎では髓質にうずら卵大灰白色腫瘍が認められた。組織学的には，脾臓，リンパ節，腎臓など全身諸臓器にリンパ腫の高度な浸潤性浸潤増殖が認められた。腫瘍細胞は大型の類円形核あるいは まが玉様の核と弱好酸性の豊富な細胞質有していた。また同細胞は明瞭な核仁を1ないし2個有し，著しい多形性を示した。細胞分裂像も豊富であった。免疫組織学的には，腫瘍細胞はBer-H2(CD-30)に陽性，CD15に陰性であった。細胞の形態と免疫染色の結果より，ヒトの未分化大細胞型リンパ腫（Ki-1リンパ腫）に相当すると考えられた。

ニホンザルのリンパ腫の報告はなく，今回の2症例は非常に貴重なものと思われた。

計画7-4

サル腸間膜肥満細胞についての検討
稲垣直樹、中井緑香、七條通孝、田中宏幸、
永井博式（岐阜薬大・薬理）

ラットの腸間膜には多数の結合組織型肥満細胞が分布しており、抗原抗体反応によるメディエーター遊離の評価に用いることが可能であり、また、光学顕微鏡による形態観察も容易である。本年は、肥満細胞活性化を検討する材料としてのサル腸間膜の有用性について検討した。

サル腸間膜から脂肪沈着の少ない部位を切りだし、toluidine blue 染色後光学顕微鏡下に観察した。また、1.2% 過塩素酸を含有する Tyrode 液でヒスタミンを抽出して定量した。

腸間膜の血管近傍には脂肪が沈着するが、脂肪沈着のみられるやや厚みのある部位に少数の肥満細胞が認められるにすぎなかった。また、腸間膜のヒスタミン含量は脂肪組織を完全に取り除くことが困難であるため正確ではないが、膜組織 100 mg あたり、ヤクザル（♂, 8.4 kg）では 162 ng、カニクイザル（♂, 5.2 kg）では 94 ng であった。

検討には脂肪沈着の少ない、薄い膜部分を使用した。この部位には肥満細胞はほとんど分布していないと思われる。また、ヒスタミン含量もサル肺切片（組織 100 mg あたり平均で 3.4 μg, n=3, 1995 年）に比して非常に少なく、顕微鏡による観察結果を裏付けるものと考えられる。